

シカによる造林木の被害防除に関する研究 (IV)

— 鹿児島県における生息の分布状況と剥皮被害木の発生時期と形態 —

鹿児島県林業試験場 谷口 明

1. はじめに

鹿児島県におけるニホンジカの生息分布状況については、本県環境政策課が実施した1/5万地形図を縦横にそれぞれ4等分としたメッシュ図による調査結果¹⁾がこれまでに報告されている。しかしながら、今後期待される個体群管理技術の開発に当たっては、それぞれの個体群の詳細な分布域が必要視される。そこで、聞き取りや踏査によりそれらの生息分布域を地形図に直接表示した調査を行ったので報告する。

また、造林木における剥皮被害の発生時期と形態については、霧島山系の調査結果を前報²⁾で報告したが、今回は山系の異なる紫尾山系での調査結果を報告する。

2. 調査地と調査方法

(1) 生息の分布域

1990年7月から1993年3月までのほぼ3ケ年にわたり、各市町の猟友会会員、並びに鳥獣保護員などから生息の現状を聞き取りするとともに、足跡や糞などのフィールドサインによる生息の現地確認と造林木などの被害状況を調査した。

(2) 剥皮被害の発生時期と形態

調査地は鶴田町平江のスギ、ヒノキ18年生林で、標高が200~250m、傾斜が10~30度の西向き斜面である。生立本数はスギが2,200本/ha、ヒノキが2,700本/haであり、樹高は前者が10~13m、後者が7~10mであった。

1992年8月31日にスギ800本、ヒノキ1,338本の固定調査木について、これまでの累積被害本数を調査するとともに、その後の被害の発生状況を翌年3月1日までほぼ1ヶ月毎に調査した。

3. 調査結果

(1) 生息の分布域

調査結果は図-1に示した。県本土に生息するキュウ

シュウジカの主要な生息域は北西部の山塊であり、これらは霧島山系、大口市間根ヶ平、柴尾山系、八重山~烏帽子岳の4個体群に大別され、この他大隅半島の佐多町大中尾地区に1個体群が認められた。また、離島の熊毛地区に生息するヤクシカは種子島、馬毛島、屋久島、口永良部島の4島に分布がみられた。これらの分布状況は、1978年度に実施されたメッシュ調査の結果³⁾とほぼ同様ながら、多くの地区で造林木や里山の農作物に対する被害の増大が聞き取りされた。

造林木などの被害発生量が特に大きい市町は、本土では霧島町(霧島山系)、大口市(関根ヶ平)、出水市、鶴田町、宮之城町、東郷町(以上柴尾山系)、樋脇町(八重山)で、離島の熊毛では屋久町、上屋久町(屋久島)、西之表市、中種子町(種子島北部)であった。これらの被害の多発地区では、生息を示す足跡や糞などフィールドサインの出現頻度が高く、今後適正な生息密度の調整が必要と考えられる。一方、大隅半島の佐多町に生息する個体群は聞き取り調査の結果、その生息域が大きく縮小しており、しかも、フィールドサインの発見率が小さく、個体数がかなり少ないと考えられ、種の維持が危機的状況にあるといえる。

(2) 剥皮被害の発生時期と形態

被害の発生は9月から翌年1月までの期間にみられ、その本数は9月が11本、10月が30本、11月が10本で、12月と1月はそれぞれ1本と2本であり、10月をピークとする9~11月に集中して認められた。また、被害木の木部露出面には歯跡が全く無く、筋状の擦り傷のみが観察されるにすぎず、いずれもが雄シカによる角擦りによるものと判断された。これら被害の発生時期とその形態は前報²⁾の調査結果と全く同じであり、個体群による違いは認められなかった。

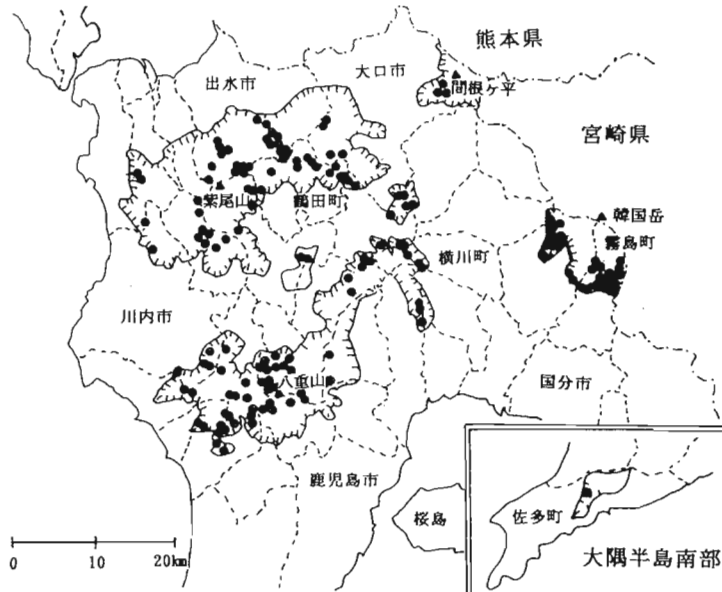
なお、調査固定木の累積本数被害率は、スギが18%、ヒノキが33%であり、後者の被害率が高かった。しかしながら、スギによる造林が主体である種子島のスギ8年生林分では、立木の46%が被害を受けており²⁾、ヒ

ノキがスギに比べて加害され易いとは言いがたい。今回の調査林では、胸高直径15cm以上の小径木に被害の多発傾向があったが、スギはヒノキに比べて成長が良く、その多くが胸高直径15cm以上の立木に早くなったことに加え、ヒノキはその植栽地が比較的シカ道の多い斜面上部や尾根筋であったことが、ヒノキで被害率が高

かったことの要因と考えられる。

引用文献

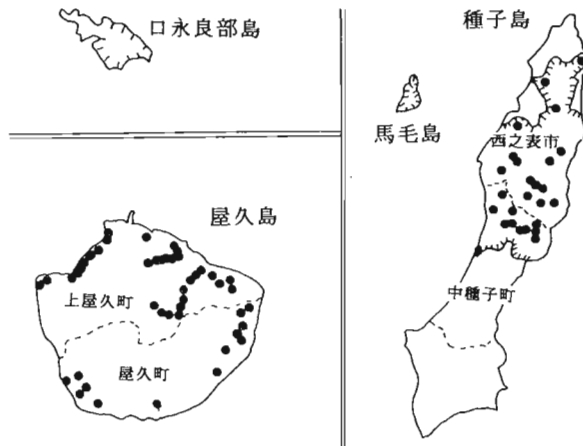
- (1) 鹿児島県：環境庁委託第2回自然環境保全基礎調査, 18~24, 1978
- (2) 谷口 明：日林九支研論, 46, 155~156, 1993



(県本土)

凡例 ○ 生息域

● フィールドサイン確認地



(熊毛地区)

図-1 ニホンジカの生息分布域